

高大接続入試とラウンドテーブルとの関わりと評価

— 高大接続ラウンドテーブルから始める高大接続入試 —

中野 正俊, 井上 咲希, 田中 千晶, 和田 啓吾 (金沢大学)

知識基盤社会への学びの転換が進み、大学教育においても、アクティブラーニングの導入が進んでいる。2018 年度に新しい学習指導要領が発表され、様々な探究科目の導入が進んでいる。それぞれの段階で能動的学習へと教育改革が進む中、それらをどう接続するかという教育接続改革についての議論が盛んに行われている。高大接続改革が進む中、大学入試改革においては、探究学習を評価し、入試へとつなげることは重要な課題である。金沢大学では、入試改革の中に位置付けられる高大接続ラウンドテーブルを実施し、様々な高大接続プログラムと同様のレポートにて評価を行なっている。この評価を分析することで、知識伝搬型の講義形式のプログラムと、探求活動型のラウンドテーブルとを同じ指標のもとで評価可能であることを明らかにした。

キーワード：高大接続, 探究学習, 入試改革

1 背景

1.1 高大接続改革

高大接続改革の議論は 1999 年 12 月中央教育審議会「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」の答申により、高大接続の在り方に言及された頃から進んできている。ここで最初に示されている重要検討課題は、初等中等教育段階で身につけられた「自ら学び、自ら考える力」を基礎として、高等教育段階で「課題探究能力」の育成を図ることであった。

しかしながら、答申後の約 10 年では、多くは大学教員の出張授業や入学者選抜に特化した接続であり、答申で示されていたような課題探究能力を育成することを考えた高大接続とはかけ離れていた(中條, 2008, 2009, 2011)。2007 年 6 月に改正された学校教育法において、学力の三要素(「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」)が規定され、学力観の転換についての本質的な議論や実践が各所で浸透し、2012 年 8 月の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」以降、能動的学修法が大きく注目され、今ではアクティブラーニングの導入が大学評価の指標の一つとなることもある。

そのような中、2014 年 12 月、中央教育審議会より「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、入学者選抜の一体的改善について」が答申された。本答申の「はじめに-高大接続改革が目指す未来の姿」では、「本答申は、教育改革における最大の課題でありながら実現が困難であった「高大接続」改革を、初めて現実のものにするための

方策として、高等学校教育、大学教育およびそれらを接続する大学入学者選抜の抜本的な改革を提言するものである。」と記されており、高大接続改革が喫緊の課題とされていたことがわかる。学力の三要素に対応していない高校教育と大学入学者選抜における課題が明示され、その上で、高等学校段階に則した学力の三要素について、その三要素の関連性も含め明確に示し、学力の三要素の中でも最も注視されている「思考力・判断力・表現力」について、“習得”した「知識・技能」を“活用”し、自らの課題発見・解決の“探究”、表現のために必要な能力であるとし、習得・活用・探究と「学力の三要素」との関連も明示した。

答申を受け、翌 2015 年 1 月、文部科学省より高大接続改革実行プランが示され、さらに翌 2016 年 3 月には、文部科学省高大接続システム改革会議「最終報告」により、高校改革・大学改革・高大接続改革、三位一体の改革について具体方策が打ち出された。そして、2017 年 7 月に出された「平成 33 年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告」では、大学入学者選抜に係る新たなルールとして、学力の三要素を多面的・総合的に評価するものへと改善することが明示された。

1.2 大学における高大接続改革

大学全入時代を迎え、従来の大学入試に選抜機能を期待できなくなり、多くの大学では学生募集に今まで以上に力を入れる必要が出てきている。先進的な大学における高大接続改革は、追手門学院大学の「アサーティブ入試」、お茶の水女子大学の「新フンボルト入

試」や北陸大学の「21世紀型スキル育成 AO 入試」などに見られるように，“育成”を核とした丁寧な大学入試の段階へと進行している。また、福井大学では、先進的に探究的な学びに取り組む全国の高校をつなぐ「福井大学高大連携ラウンドテーブル」が開催され（松田，2014）（杉山，2015），さらに福井大学の入試改革にも取り入れられた（大久保，2018）。このように高大接続改革は着実に進んでおり，大学と高校が連携した活動もより一層盛んに取り組まれている。

この高大接続教育改革の動きはスーパーサイエンスハイスクール(SSH)，スーパーグローバルハイスクール(SGH)などの牽引によりさらに加速し，高校生向けの出張授業だけでなく，高校生と大学生との協同研究など様々な取り組みが行われている。

中川(2005)は SSH に関わることは大学の責任であると述べており，大学が高校と連携して研究室訪問や出張授業を行なった結果生徒の進路姿勢が向上し，さらにミスマッチを予防するなどの結果を紹介している。また，富田ら(2014)は高校時代に教科学習も探求学習も熱心に取り組んでいた学生ほど大学での学習にも積極的であることを指摘している。そのため，大学側が高校と連携して探求活動の支援を行うことは能動的な学習者を育てることに役立つと言え，高大連携の大きな効果は生徒たちの進路意識への影響ではないかとも言われている（中川，2005）。また，大学入学後のミスマッチは高等教育において大きな課題であり，文部科学省の調査によると大学を退学する理由として他の大学への転学は経済的理由の次に多いとされる(文部科学省，2014)。高大接続プログラムに参加することで大学と大学での学びを知り，その中で自身を振り返る機会を得ることで，こうした進路選択のミスマッチを防ぐことも期待できる。

1.3 高校教育における高大接続改革

2017~8年，「よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有」し，社会との連携および協働によりその実現を図っていく「社会に開かれた教育課程」の実現を目指して，次期学習指導要領が告示された。学校は，生徒たち一人一人が持続可能な社会の創り手となれるように，未来社会を切り拓くための資質・能力，すなわち学力の三要素を確実に育成することが期待されている。

その実現のため，高校には特に，「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」へ転換され，さらに教科においても探究と名の付く科目が多数新設されるなど，探究モードへの転換が名実ともに期待されてい

る（文部科学省，2018）。高校段階では，探究活動による学習成果を実証した実践研究の数は少なく，探究的な見方・考え方を目標とする総合的な学習の時間についても，高校教育段階に多くの課題があることが中央教育審議会答申（2016）でも特筆されている。

近年では，SSH や SGH，スーパー・プロフェSSIONAL・ハイスクール（SPH），地域に根差した高校などの牽引により，課題発見・解決学習，探究活動に取り組む高校が急増し，その価値も広く浸透してきた。とりわけ，グローバルな社会課題，ビジネス課題をテーマに横断的・総合的な学習，探究的な学習を行うことを掲げている。SGH のインパクトは大きい。一方で，高校教育改革は大学入試改革次第であるとし，様子をうかがう高校も多く，大学の高大接続改革に取り組む姿が非常に重要なものとなる。そんな中 2020年度には入試改革が進み，センター試験に代わる「大学入学共通テスト」や総合型選抜の実施など，急速に大学入試改革が進んでいる。

1.4 課題と目的

金沢大学が実施する「KUGS 高大接続プログラム」には対面参加型の Live セミナー，ラウンドテーブル，Web 視聴型の Web セミナーの3種類のプログラムがある。

この中で，ラウンドテーブルは「KUGS 高大接続プログラム」の実施に先駆けて開催されており，また，対面参加型の Live セミナー，Web 視聴型の Web セミナーとは様相の異なるプログラムである。Live セミナー，Web セミナーは，対面参加型，Web 視聴型の違いはあるものの，大学の講義を受講するような知識伝搬型のプログラムであり，大学で取り組まれている研究の紹介も交えながら，高校生にとって興味・関心を持ちやすい工夫をほどこし，大学の学びに触れることができるプログラムである。これらは大学生になると授業の中でレポートを課されることもあろう内容であり，高校生にとっても触れやすく，取り組みやすい内容である。また，大学にとってもレポートとその評価というのはこれまでの経験が蓄積されており，入試の中に位置付けることに対する障害は少ない。

一方で，ラウンドテーブルにおいては，探究活動型の学習であり，知識伝搬型となる講義を受講するスタイルとは大きく異なるプログラムである。このラウンドテーブルを，同じ「KUGS 高大接続プログラム」として実施し，高大接続入試の中に位置付けるには，「評価」は避けることができない。探究活動の活動自体を適切に評価することは難しく，何よりも入試と結

びつく評価を意識しながら活動に取り組むのは探究活動としては適切であるとは言いがたい。そこで、ラウンドテーブルの活動を一つの学びと捉え、ラウンドテーブルを終えた後に、参加者が各自で自身の活動を振り返ることをレポート課題として課すことで、活動そのものを評価するのではなく、活動を振り返り、考察し、表現することを評価することにした。他の「KUGS 高大接続プログラム」においても同様に、それぞれのプログラムを受講した上で、その内容を振り返り、考察し、表現することをレポート課題とし、全ての「KUGS 高大接続プログラム」において共通のレポートを課すことで、それぞれの異なるプログラムに対して一律の基準で評価することを目指した（図 1）。

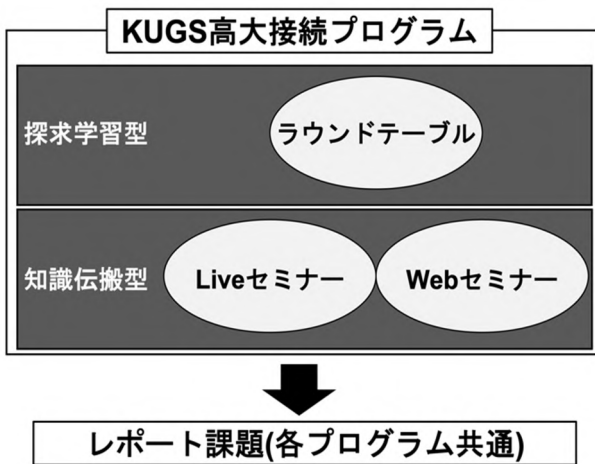


図 1. KUGS 高大接続プログラム

本研究では、知識伝搬型である講義形式のプログラムと、探求活動型であるラウンドテーブルに同様のレポートを課し、同一の基準にて評価できることを確認し、また、ラウンドテーブルを入試の中に位置付ける意義について考察することを目的としている。また、本報告が、同等の取り組みや、その他の様々な探究活動を評価するにあたり、一つの実践例として参考になれば幸いである。

2 金沢大学高大接続ラウンドテーブル

金沢大学では、高大接続教育改革のキーワードを探究とし、2017 年度に第 1 回金沢大学高大接続ラウンドテーブルを二日間にわたって開催した。このラウンドテーブルは「福井大学高大連携ラウンドテーブル」を参考として開催され、ラウンドテーブルの開催目的は探求活動の進んでいる高校から経験や知識を学ぶとともに、当事者同士の情報交換やネットワーキングを促し、さらに大学教員への意識啓発という意義があっ

た。

参加者には、探求学習を活発に行なってきた高校から高校生、高校教員を招聘、またこれから探求学習を行いたい高校生、高校教員、そして、大学にて能動的に学ぶ大学生・留学生、大学教員、教育関係の社会人らが同じテーブルを囲み、ディスカッション・探求活動を行なった。

以後、第 2 回、第 3 回のラウンドテーブルを同様に実施し、最大約 40 名程度の高校生が参加している。第 4 回以降はオンラインにて規模を縮小したものとなっているが継続して開催し、2021 年には第 6 回を実施し、最大約 20 名程度の高校生が参加している。特に第 3 回以降は、金沢大学が 2021 年度入試より実施している KUGS 特別入試への出願が可能となる KUGS 高大接続プログラムの一つとして実施している。そのため、第 3 回以降のラウンドテーブルには金沢大学を志望する高校生の参加者が多く、参加者の約 7 割が課題レポートにも取り組み、提出をしている。特に、近隣の高校へ通う高校生の参加が増える結果となっており、第 4 回以降も第 3 回同様に近隣の高校生が中心ではあるものの、オンラインでの開催となっていることが影響し、若干名ではあるが遠隔地からの参加も見られる。

このラウンドテーブルでは、探究的な学習に取り組んできた高校生や大学生が自己の課題探究の過程を立場の異なる多様な聴き手の前で語り、聴き手から評価や質問を受け、それに誠実に答え、その活動を通じて自己の学びをより深め、より深化した課題を発見し、さらに学び続ける動機を獲得する場とすることを目的としている。また、共通の課題を多様な立場の人間が協働的に探究する体験を通じて、これからの社会の形成者、市民として求められている能力とは何か、それを基礎づける学力とは何かについて共通の合意形成の場となることを期待している。

近年の教育改革が進む中で様々な探究活動に取り組んできた高校は多いものの、第三者の前で自身の考えを主張する機会が少なく、そのような場を探している参加者が多いことも影響し、これまで、多くの参加者が集まってきた。高校の探究活動の中でも発表を伴うものも多いが、同じ学校の生徒や、教員、または地域の高校生同士での発表・報告が多い。金沢大学高大接続ラウンドテーブルにおいては、他地域、他学年の高校生や、大学生、大学教員を交え、普段接する機会の少ない第三者と交流し、より多様性のある活動の機会となることを期待している。そのため、高校生が決して入試の一環として取り組んでいるというわけではな

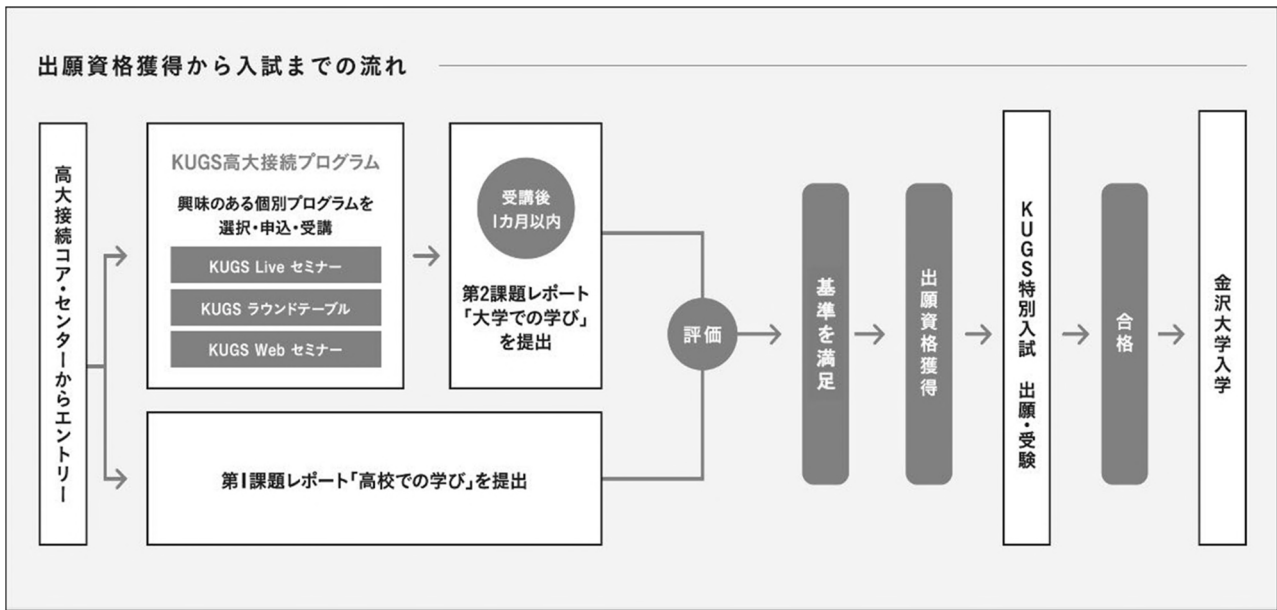


図2. 金沢大学の KUGS 特別入試

く、あくまで探究学習であるラウンドテーブルの先に入試があり、ラウンドテーブルに参加した上で、KUGS 特別入試が選択肢の一つとして存在するという考えのもとで、高大接続ラウンドテーブルを入試改革の中に位置付けている。

3 KUGS 特別入試

金沢大学では、令和3(2021)年度入学者選抜から「KUGS 特別入試」を実施しており、初年度の志願倍率は0.9倍であった。この特別入試は、「基礎的知識・技能を修得し、それらを活用して自ら課題を発見、

探究する能力を備えている人」、「将来に明確な目標を持っており、主体的に行動し、他者と協働しながら、自身の夢を実現しようとする強い意欲を持っている人」を受け入れて育成するために、志願者の能力・資質・意欲を多面的・総合的に評価する入試としており、「学力の三要素」を踏まえた上で評価することを示している。

この KUGS 特別入試に出願するには、2種類のレポートを提出する必要がある(図2)。一つは、金沢大学が提供する「KUGS 高大接続プログラム」を受講して、提示された課題に対してレポートを提出する

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
A.自己の立ち位置を知る能力	倫理観や科学的知見にやや不足があり、自己の位置・使命についての意識も薄い。	倫理観や科学的知見はある程度持っているが、自己の位置や使命についての意識がやや薄い。	倫理観と科学的知見に基づく視野から自己の位置や使命をある程度把握できている。	倫理観と科学的知見に基づく視野から自己の位置や使命を把握できている。	高度な倫理観と科学的知見に基づく広く深い視野から自己の位置や使命を把握できている。
B.自己を知り、自己を鍛える能力	自己の能力への自覚が弱く、将来の目標が立っていないため、自己を向上させる意欲も薄い。	自己の能力への自覚がやや弱く、将来の目標がぼんやりしているため、自己を向上させる意欲は有るが、それを十分に発揮できていない。	自己の能力を自分なりに認識し、将来の目標を持って、目標実現に向けてある程度努力することができている。	自己の能力を認識し、将来の目標を明確化して、目標実現に向けて努力することができている。	自己の能力を客観的に認識し、将来の目標を明確化して、目標実現に向けて十分に努力することができている。
C.考え・価値観を表現する能力	自身の考えや価値観を表現する力が不十分である。	自身の考えや価値観を表現する力がある。	自身の考えや価値観を表現し、他者に伝える力がある。	自身の考えや価値観を論理的に構成して表現し、他者に伝える力がある。	自身の考えや価値観を論理的に構成して明確に表現し、的確に他者に伝える力がある。
D.世界とつながる能力	自身の持つ文化への関心が薄く、異文化を理解し、異文化の人々と共生・共存することの必要性も感じていない。	自身の持つ文化への関心はある程度持っているが、異文化を理解し、異文化の人々と共生・共存することへの関心がやや薄い。	自身の持つ文化への関心を持つとともに異文化を理解し、異文化の人々と共生・共存することに関心を持っている。	自身の持つ文化への関心を持つとともに異文化を理解し、異文化の人々と共生・共存する意欲をもっている。	自身の持つ文化を理解するとともに異文化を理解し、異文化の人々と共生・共存する能力を持っている。
E.未来の課題に取り組んでいく能力	未来の世界への関心が薄く、未来の課題に取り組んでいく必要性も感じていない。	ある特定の観点から未来を予測し、未来の課題に取り組む必要性をある程度感じている。	ある特定の観点から未来を予測し、未来の課題に取り組んでいく意欲をもっている。	広い視野から総合的に未来を予測し、未来の課題に取り組んでいく意欲をもっている。	広い視野から総合的に未来を予測し、未来の課題に取り組んでいく能力をもっている。

図3. KUGS 特別入試ルーブリック

「大学での学び」である。「KUGS 高大接続プログラム」には対面参加型の Live セミナー、ラウンドテーブル、Web 視聴型の Web セミナーの 3 種類があり、高校生は、複数あるプログラムから、興味・関心に応じて自由に選択して受講することが可能である。提出されたレポートは高大接続コア・センターで評価を行い、それぞれのレポートに合わせて評価コメントとともに受講者にフィードバックされる。このレポートは専門的な知識などを求めるものではなく、ルーブリック(図 3)を基に高大接続コア・センターの担当者が客観的な立場で評価を行う。

これに加え、高校生が日頃、部活動や学習活動などで経験した学びについて記述する「高校での学び」を提出する必要がある。「大学での学び」同様に提出されたレポートはルーブリックを基に高大接続コア・センターで評価を行い、評価コメントとともに受講者にフィードバックされる。これら「大学での学び」と「高校での学び」それぞれのレポートで基準を満たすことで、出願資格を得ることができる。

ルーブリックは金沢大学が示す金沢大学<グローバル>スタンダード(KUGS)を基準としており、KUGS とは、基本的な教育目標を実現するために金沢大学が育成する人材の具体的な姿を提示したものである。

4 ラウンドテーブルの入試への位置付け

金沢大学高大接続ラウンドテーブルは、「KUGS 高大接続プログラム」の一つであり、金沢大学の入試改革の中に位置付けられたラウンドテーブルである。この金沢大学高大接続ラウンドテーブルが、参加者にとってどのような位置付けとなっているか、第 3 回金沢大学高大接続ラウンドテーブル参加者へのアンケートにより分析を行なった(図 4)。

参加者の多くがラウンドテーブルに参加したことが

刺激になったと答えており、参加者にとって有意義な時間となったことがうかがえる。一方、「ラウンドテーブルが高大接続につながるか」という質問に対してはやや懐疑的であるという結果であり、刺激を受けたものの、このラウンドテーブルをいかに高大接続につながっていくのかが課題であることが読み取れる。また、「探究活動につながるか」という質問についても、やや懐疑的であった。ラウンドテーブルの特徴であるが、ラウンドテーブルをきっかけに新たな疑問が浮き上がることで、若干ではあるものの懐疑的な意見へつながったのではないかと推察する。

アンケートを見ると、やや懐疑的な意見もあるものの、高大接続改革の中に位置付けられたラウンドテーブルに対して好意的な意見がほとんどである。中には、ラウンドテーブルをきっかけに、「KUGS 特別入試」について詳しく知りたいとアンケートに記入する高校生も見られるなど、高大接続ラウンドテーブルの先に入試が存在する、という位置付けをある程度達成できていると見られる。2020 年度のラウンドテーブルにおいては、参加者の半数以上が高校 2 年生、または 1 年生であり、直近の入試のためだけに参加している高校生よりも、自身の興味によって参加している高校生が多いことがうかがえる。

そして、高大接続ラウンドテーブルに参加した高校生の約 7 割が、「KUGS 特別入試」の出願に必要となる「KUGS 高大接続プログラム」のレポート課題に取り組んでおり、高大接続ラウンドテーブルに参加した上で、高校と大学とをつなぐ入試へと向かっていることがわかる。そのため、高大接続ラウンドテーブルを入試の中に位置付けることは達成できていると考える。一方で、自己研鑽のためだけに高大接続ラウンドテーブルに参加し、「KUGS 特別入試」を視野に入れていない高校生も一定数いるが、高校生に対して学習の場を提供することができていることの裏返しで

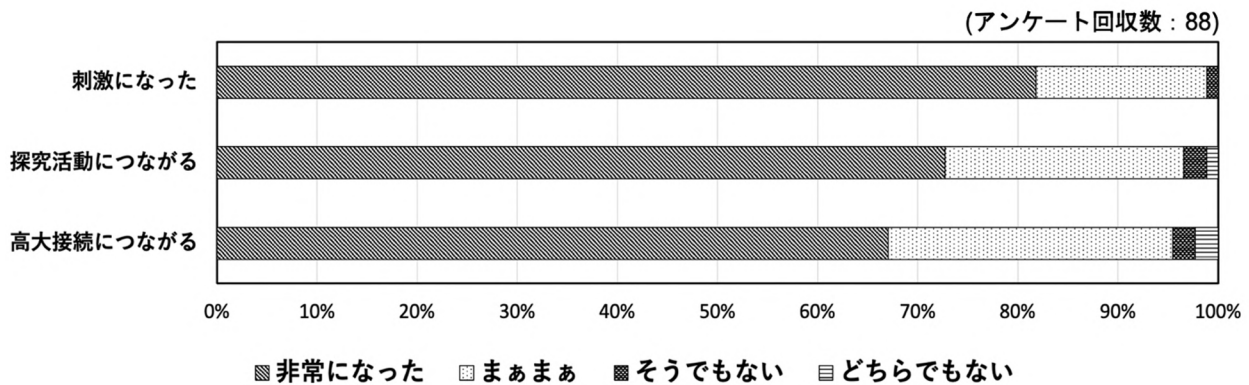


図 4. 第 3 回ラウンドテーブルアンケート

もあるため、今後の課題ではあるものの大きな問題とは認識していない。

5 ラウンドテーブルの評価

次に、高大接続ラウンドテーブルの評価が、高大接続ラウンドテーブル以外の「KUGS 高大接続プログラム」と同一の基準にて評価できているか、また評価に問題がないかを確認するため、それぞれのレポートの評価内容の比較を行なった。比較の際には、ループリックをもとに5項目を5段階で評価した結果の合計値にて比較を行った。ここでは、ラウンドテーブルを除くプログラムに対する全レポートの平均値を「1」として規格化した上で縦軸とし、その分布を見ている(図5)。知識伝搬型の各プログラムと、探究活動型のラウンドテーブルとで課されるレポートの内容は同一であり、どの「KUGS 高大接続プログラム」に参加し、レポートを提出しても評価に極端な差が生じることはないと言えるかを確認する。

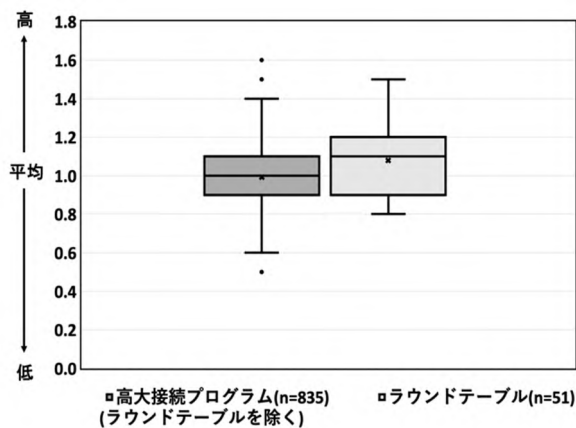


図5. 高大接続プログラムの評価

それぞれを比較すると、若干ラウンドテーブル参加者のレポートの評価が高い傾向にあるものの、大きく差が生じることはなく、ラウンドテーブルと他の高大接続プログラムとの間での評価の平等性は保たれていると考えられる。ラウンドテーブル参加者のレポートの評価が若干高い傾向にあるのは、ラウンドテーブルに参加する高校生がより積極的に活動し、活動を振り返ることに意欲的であることに起因すると思われる。その一方で、各レポートを詳しく調べると、ラウンドテーブル参加者のレポートは、自身の意見・考えに固執する傾向にあり、自身の考えを主張したいとする積極性が影響しているものと考えられる。

プログラムによって多少の傾向の違いが生じることは参加者層が異なるためにある程度は生じうることで

あるが、KUGS 特別入試においてはこのレポートの評価を直接入試の評価とはしておらず、あくまで出願資格を得るためのステップであり、各高大接続プログラムにおいて傾向の差が生じることは重要な問題とはしていない。ここで重要となるのは、ラウンドテーブルを他の高大接続プログラムと同様の評価を行うことができる点であり、全ての高大接続プログラムを同様の基準で評価することが可能であることである。ラウンドテーブルを特別視することなく、KUGS 特別入試の中に位置付けることができる事実は、ラウンドテーブルだけでなく、様々な探究活動を入試改革の中に位置付けることを考える点においても重要な意義がある。

6 ラウンドテーブルの課題

金沢大学高大接続ラウンドテーブルは、これまで第6回まで実施されており、今後も引き続きの実施が予定されている。KUGS 高大接続プログラムの中で、入試改革の一部として位置付け、ラウンドテーブルの活動を通して評価までつなげることができることについては一定の成果を得ることができた。

しかし、今後課題となるのは、高大接続ラウンドテーブルの継続性と、更なる発展である。回数を重ねてはいるものの、その浸透は容易ではない。ラウンドテーブルのような活動を通して高校生が大学と接する機会が増え、大学からのメッセージを受け取ることで、高大接続改革を実感し、更なる探究学習の発展へとつながることを期待するためにも、より広く浸透し、より深い探究へとつなげるためにも、ラウンドテーブル主催者の研修などの能力開発も今後の重要な課題となる。

さらに高大接続ラウンドテーブルを経て、金沢大学へ入学した学生に対する追跡調査や、大学生となり大学で学んだ後に、再度大学生としてラウンドテーブルに参加することにつながるなど、大学入学後の活動と結びつける高大接続教育を考える必要もある。

参考文献

- 中央教育審議会 (1999) . 『初等中等教育と高等教育との接続の改善について (答申) 』
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201.htm (2021年12月1日).
- 中條安芸子 (2011) . 「高校と大学の教育的接続7年間で考える協働的接続プログラムのあり方」 『大学教育学会誌』 **33**(2), 144-149.
- 中條安芸子 (2009) . 「高大連携で取り組むキャリア教育プロ

- グラムの実践』『キャリアデザイン研究』**5**, 185-190.
- 中條安芸子 (2008) . 「共同運営型の高大連携システムづくりに関する一考察：キャリア教育の視点から見た高校と大学との連携のあり方」『情報研究』**39**, 185-193.
- 中央教育審議会 (2012) . 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)』
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/tou shin/1325047.htm (2021年12月1日).
- 中央教育審議会 (2014) . 『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について (答申)』
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/tou shin/1354191.htm (2021年12月1日).
- 福島一政 (2016) . 「アサーティブプログラム・アサーティブ入試と新たな高大接続の可能性～追手門学院大学～」『大学教育と情報』No.1, 22-25.
- 松田淑子 (2014) . 「協働探究型の高大連携実践から拓く大学入試改革への展望」『福井大学高等教育推進センター年報』No.4, 47-60.
- 杉山晋平 (2015) . 「高大接続改革をめぐる課題とその実践的展望—高大連携ラウンドテーブル事業のあゆみをふりかえって—」『福井大学高等教育推進センター年報』No.5, 29-54.
- 松田淑子 (2014) . 「連携を中心とした高大接続の在り方へ～福井大学 高大連携ラウンドテーブルの試み～, 高校改革の事例から探る高大接続の在り方」『文部科学教育通信』No.333, 教育新社 20-21.
- 大久保貢 (2018) . 「探究力に対するルーブリック評価の開発」『大学入試研究ジャーナル』**28**, 53-59.
- 中川和倫 (2005) . 「SSHでここまで来た～高大連携の推進・進路意識の高揚・課題研究の活性化～」『日本科学教育学会年会論文集』**29**, 301-304.
- 富田知世 (2014) . 「高校時の学習行動と大学での学業適応の関連 教科学習と探究学習への取り組みに着目して」『大学評価研究』**13**, 123-134.
- 文部科学省 (2014) . 『学生の中途退学や休学等の状況について』
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/_icsFiles/afeldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf (2021年12月1日).
- 文部科学省 (2018) . 『高等学校学習指導要領解説』
https://www.mext.go.jp/content/20211102-mxt_kyoiku02-100002620_1.pdf (2021年12月1日).